資料-1

岡崎市水環境創造プラン検討委員会
設立趣意書

乙川は巴山（標高 719m）に源を発し、山間部を流れて茅原沢で男川と合流した後、岡崎市の中心市街地を流れて岡崎城を過ぎ、八帖南町で矢作川に合流する一級河川である。その流域面積は市域面積の約 7 割に、流路延長は 90km に及び、主要な支川として男川の他に鉢地川、山綱川、伊賀川等がある。

乙川の下流域に位置していた旧岡崎市は、西三河の拠点都市としての役割を果たすとともに古くからわが国の東西交流の要衝として発展してきたが、戦後の高度成長期を通じ、都市への人口や産業の集中により、水質汚濁、河川流量の減少、渇水、親水性の低下など水環境に関する問題が生じている。また、上流域に位置する額田地域では豊かな緑と水を擁し、これを基幹産業である林業や農業が栄えていたが、就業者数の減少や高齢化により、山林の荒廃や耕作放棄地の増加につながり、これを要因とする環境の悪化、保水能力の低下などが課題となっている。

人々の暮らしと水の関係について考えると、昔から日本人の水、川とのつながりの中には循環があった。しかし、都市化が進むにつれて水の循環が断ち切られてきた。例えば、昔は地面にしみこんで流域内にしばらく保有されていた雨は、今はすぐに川へ流してしまい、生活に必要な水は流域外から運び込んで使い、汚した後海へ捨てるという使い捨てのつながりになっている。

このような状況の下、平成 18 年 1 月 1 日に旧岡崎市と旧額田町は合併に至り、人口 37 万人、総面積 387km^2、その 61%を森林原野、10%を農地、11%を宅地が占めるという都市部と農山村の両面を併せ持った地域となった。また、合併に伴い水環境の面から見ると、旧岡崎市で使用する水の約 5 割を供給していた乙川流域が全て新岡崎市域に含まれることとなり、循環を意識した総合的で画期的な取り組みの展開が可能となった。

これを機に、行政だけでなく、市民、学識経験者等、多くの主体の目から水を捉え、環境・利水・治水を総合的に見て岡崎市の将来の「水環境」のあり方を「岡崎市水環境創造プラン」として取りまとめるべく、「岡崎市水環境創造プラン検討委員会」を設立する。